

# 中世・草戸千軒探検 28

## 遊ぶ

草戸千軒 I 展示室では、今からおよそ 700 年前の鎌倉時代後期を中心とする時代の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活の様子を詳しく紹介しています。

今回は「遊び」のコーナーに展示した資料から、当時の人々が遊戯具に込めた思いについて考えてみましょう。

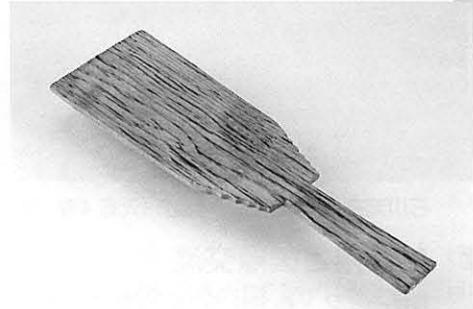
草戸千軒町遺跡からは、多数の遊び道具が出土しています。これらの多くは、つい最近まで私たちの身のまわりに存在した遊び道具とまったく同じ形のもので、現代に伝わる伝統的な生活文化が、草戸千軒の栄えた中世に形づくられたものであることを示しています。たとえば、写真1の羽子板<sup>はごいた</sup>や写真2の独楽<sup>こま</sup>、さらには写真3の賽子<sup>さいごころ</sup>。これらは現代でもよく似た形の道具が使われており、写真を見てすぐにその名称や用途が思い浮かぶことでしょう。

その一方で、江戸時代になると廃れてしまったものもありました。写真4の毬杖<sup>きうちょう</sup>がその代表例で、現代のゲートボールのスティックに似た道具で、毬<sup>きゅう</sup>と呼ばれる木片を打ち合う姿が絵巻物などに描かれていますが、遊び方の詳細についてはよくわからなくなっています。正月飾りを燃やす「とんど」の別名である「左義長」<sup>さぎちやう</sup>は、三毬杖を意味し、この毬杖を三本立てて燃やしたことに由来するといわれています。

中世の遊びは、現代と同様に日常生活に潤いをもたらし、社会集団の結びつきを強化するものであると同時に、無病息災<sup>むびょうそくさい</sup>を願ったり、吉凶<sup>きつきやう</sup>を占ったりする呪術的な役割も担っていました。そのために、季節の節目である節句<sup>せつぐ</sup>に、さまざまな願いや祈りを込めて繰り広げられることが多かったのです。羽子板や独楽回しが正月の遊びとして伝わっているのも、そうした季節の変わり目を祝う遊びとしての性格を示しているのです。

最近の遊びといえば、ゲーム機やスマートフォンで楽しむゲームが盛んですが、いつでもどこでも楽しめるようになると、遊びと季節との関係はすっかり忘れられてしまうことになるのでしょうか。

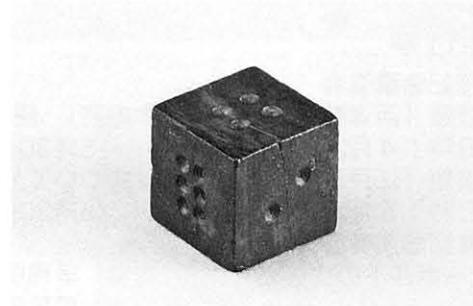
(主任学芸員 鈴木康之)



羽子板 (写真1)



独楽 (写真2)



賽子 (写真3)



毬杖と毬 (写真4)